

〔「中国美術コレクション展」によせて〕

張宏「越中真景図冊」と明代江南の紀遊文化

大和文華館所蔵の「越中真景図冊」は全部で8図から成る小さな山水画冊です。明代末期、崇禎12年(1639)秋に、蘇州の文人画家、張宏(1577-1660?)によって制作されました。最後の1図には大体次のような意味の張宏の題跋が記されています。

越(現在の浙江省一帯)の名勝は天下に冠たるものだと言う。私は崇禎12年の春によく旅行する機会を得た。そこで目にしたものは、それまで聞いてきたものとは違うところがある。そこで旅から帰って画網を取り出し、実際に見たものを描いたのである。やはり百聞は一見にしかずと言うべきか。

「張宏は、この作品が自身の旅行の経験を反映させたものであると、見る人に強く印象づけようとしているようです。画中には、馬や驢馬ではなく人夫の担ぐ肩輿で移動する、17世紀当時よく見られたであろう旅人の姿も描かれています。」

明末の江南の文人たちにとって旅行は生活の一部であり、身近な娯楽でした。この風潮を受けて、当時、多くの旅行記が著され、また紀遊山水が描かれています。紀遊山水図には様々な形式がありますが、その内の一つに、複

数の小画面の山水画を組み合わせた画冊形式が挙げられます。これは、明代初期の画家、王履(1332-1383-)が実際に訪れた華山(陝西省)の各景40図を描いた、「華山図冊」(北京故宮博物院・上海博物館蔵)をモデルとしたものと考えられています。代表的な作例に、嘉靖33年(1554)、陸治(1496-1576)が自身の住む蘇州から白岳(安徽省)に至るまでの名所旧跡を16図にわたって記録した、「白岳紀遊図冊」(藤井有鄰館蔵)があります。張宏の「越中真景図冊」もこのような紀遊山水の伝統に連なるものと言えるでしょう。

以上のような歴史的背景を踏まえた上で、「越中真景図冊」の魅力に迫ってみましょう。ここでは特に第4図[図1]に注目してみました。両側に峻峻な岩壁に挟まれた河が描かれ、その間を進む一艘の舟が俯瞰の角度で表されています。このような景観を「画になるもの」と捉えた画家は張宏が初めてではありません。

例えば、先ほど紹介した陸治「白岳紀遊図冊」の「七里龍図」[図2]は、ほぼ同様の構図で、富春江の名所「七里龍」とそこを通る小舟を描いています。切り立った崖と曲がりくねった河の流れが続く七里龍の奇観は、高い視点から捉えられ、舟の小ささと対比されることで、よりその雄大さが強調されています。また、山肌

に打たれた米点(宋代、米芾・米友仁父子が雲山を描くのに用いた横長の点描)は雲煙の立ちこめる湿潤な空気を伝え、淡藍や淡緑、淡朱などの美しい色彩によって静かで幻想的な世界が表現されています。これに対して張宏は、より近接した視点から、ごつごつした岩肌や逆巻く水流、舟の内部まで克明に描写しており、二人の画家の関心の違いは明らかです。

激しい溪流とその上を航行する舟のダイナミックな情景描写は、同じ蘇州の画家、謝時臣(1487-1567-)が得意としたものでした。謝時臣が揚子江の三峡の一つ、巫峡を描いた大幅、「巫峡雲涛図」(クーヴランド美術館蔵)[図3]の近景と張宏画を比べてみましょう。構図以外にも、岩壁に打ち寄せる波しぶきや、水面付近のもこもことした水煙の表現で流れの激しさを表す手法がよく似ており[図4]、張宏の謝時臣画学習がうかがえます。

しかし張宏画には彼独自の工夫も見られます。まず、その対角線を基準線とした画面構成に注意したいと思います。張宏画では、「巫峡雲涛図」に比べ、河の流れが左上から右下へと直線的になり、舟体と航跡もこの対角線に沿うような角度で配置されています。さらに、張宏はこの直線上に極端な遠近の差をつけています。水流表現を見ると、画面上方では部分的に淡墨で短目の平行線が引かれているだけなのに対し、下方では一気に、立体的で大きく激しい波

頭の描写に変化します。遠山から、岩肌の質感をよく伝える近景の岩壁への移行もまた急激なものです。結果的に、張宏は謝時臣画にはない、舟のスピード感、遠方から瞬間に鑑賞者の眼前に迫る動きの臨場感を出すのに成功しています。

謝時臣と張宏では人物表現にも違いがあります。謝時臣画では、岩壁への衝突を避けるために必死に棹を水中へ差し入れる舟上の人々の様子が描かれ、流れの速さを示すと共に鑑賞者の風俗画的興味を満たしています。張宏画では舟は風を受けて順調に水面を滑っており、人々は体を寄せ合い固唾をのんで、目の前にめまぐるしく展開する景観を見守っています[図5]。張宏は、鑑賞者に高みの見物ではなく、画中人物の感じているスリルを共有することを促しているようです。

張宏「越中真景図冊」に限らず、明代後期の江南地方では、紀遊文化の盛行を受け、多くの画家が自分の旅行経験を様々な形で反映させて、個性的な紀遊山水図を制作していました。その中で、張宏が実際に眺めることのできた景観を伝えるだけに飽きたらず、鑑賞者の視線にゆさぶりをかけ、旅の中で実際に味わったであろう自身の感覚を彼らに追体験させようと試みている点は高く評価できるのではないのでしょうか。「越中真景図冊」は明末、紀遊山水の表現内容の豊穡さを示す作例と言えます。(植松瑞希)

図1

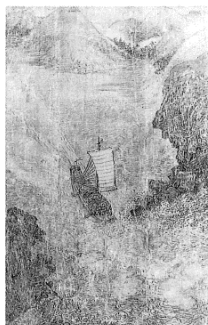


図2

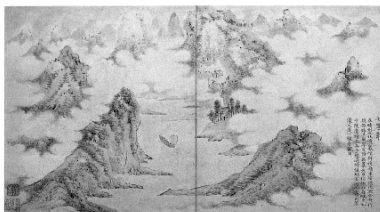


図3



図4

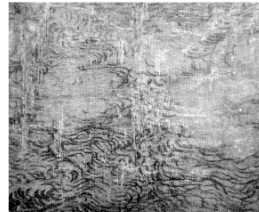
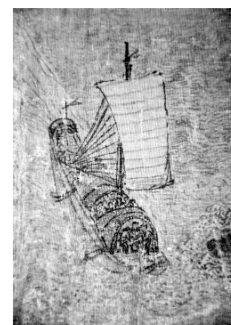


図5



図版出典 図2 有鄰館学芸部編『有鄰館精華』第五版、藤井育成会、2003年。

図3 Li-Tsui Flora Fu, *Framing Famous Mountains*, Hong Kong: The Chinese University of Hong Kong, 2009.

季刊 美のたより No.176

平成23年10月9日

発行 大和文華館